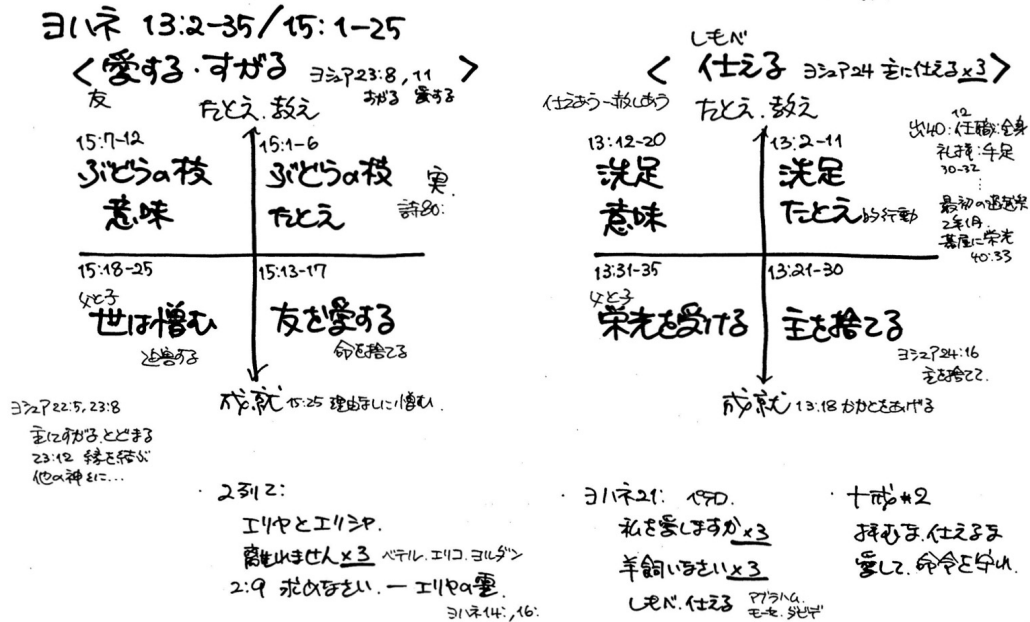




ヨハネ福音書13: 15:

2017.5.17



ヨハネ福音書13章から。「過ぎ越しの祭りの前に、この世を去って父のみもとに行くべき自分の時が来たことを知られたので、世にいる自分のものを愛されたイエスは、その愛を残るところなく示された。」と言って始まる13章から17章までの段落を、大きく4つに分けて見えています。4つに分けているうちの13章のところ15章のところということで分析をしました。13章のところと15章のところですが、13章は足を洗うという話で始まって、15章はぶどうの木、ぶどうの枝の例えです。こちら(13章)が仕える。こちら(15章)が愛するということを教えています。最後のイエス様の教えという大きなこの2つの事だと思えます。

ラザロの復活というところからこの最後の教えが始まっているということだと思えます。すけれど、エルアザルの復活、ヨシュアの復活ということで始まりますという事を分析していました。この箇所も、最後のイエス様の最後の教えということなんですが、ヨシュア記でのヨシュアの最後の教えというところは、この背景になっているのではないかと、ヨシュア、ヨシュアと書いてあるところがこの大きくくりになっているんじゃないでしょうかということで見えていました。

ヨシュア記の最後というのは、23章「ヨシュアは年を重ねて老人になりました」と言って遺言を出すところですね。「モーセの律法の書に書かれていることを断固として守り行ないなさい。他の神々に仕えるな、拝むな、主にすがりなさい、主を愛しなさい。」というところからこの教えが始まって、24章で他の神々に仕えてきたというところから連れ出されましたから、「主に仕えなさい、私と私の家とは主に仕える。私に仕

えること他の神々に仕えることなどしません。主を捨てて他の神々に仕えることなどしません。主に仕えます。主に仕えます。」ということを3度言うところですね。このヨシュア記の「主に仕える」と3回言っているところ。仕えるというのは、しもべの動詞、「しもべする、仕える」ということなので、この足を洗うというところは、互いに仕え合う。仕え合うということですが、どうやって仕え合うかというと、命令を守って許し合う、憐れみ合う。モーセの律法自体が憐れみ合いなさいと言われてるような律法でしたから、仕え合うと言った時に、この赦し合うということと言われてるのかなと思います。

「主にすがる、主を愛する」というところですけども、主にすがるというのは、主にくっついて離れない。夫と妻みたいなのものですよね。主を愛する夫と妻ですから、このぶどうの木に枝がとどまる、主にすがっているならば実を結ぶと。その命令を守って主を愛するということは、主にすがると言い方と一緒に見ることなんだろうと。他の神々に仕えない、他の神々にすがらない、主を愛して主にとどまるということですね。「すがる、愛する」ということと、「仕える」ということがこの大きな2つなのかなというふうに見ました。

出エジプト記40章、エジプトから出てシナイ山で命令を頂いて1年経ちました。やっと幕屋が建てられます。1年後の「第2年の1月、1日に幕屋は建てられました」と言っています。その幕屋を建てましたと言っていますので、これは最初の過ぎ越しの祭りです。祭りとしては最初だよね。1年目は過ぎ越しだったから、過ぎ越しの祭りとしてこの幕屋を建てて、祭りをしています。その幕屋の制度の中で全身を洗うと。アロンが全身を洗うというのは、任職の儀式的のところです。全身を洗うのですけど、この働きをするところ、生贄を捧げて仕えるところは、「モーセとアロンとその子らは手と足を洗う」というふうになっていますので、ここで「足を洗い合いなさい」と言っています。ペテロが「いや全身を洗ってください」と言うんですけど、「足だけでいいです」というのは、もうすでにきよめられていますので、手と足でいいんですよと言われているのは、この出エジプト記のこのような(40章)ところを連想するのかなと思います。これで過ぎ越しの祭りが始まるというところですね。

足を洗う、手を洗うというところで始まって、幕屋に栄光が満ちるというところから、この13章のところで、「子が栄光を受ける時が来た」というところが、足を洗って始まるストーリーの最終形です。栄光が現されるためにということです。ぶどうの枝の方の話ですね。「私の父は農夫です」の方なのですけども、こちらは詩篇の80篇です。詩篇80篇を見ると、このエジプトから連れ出されたことが、ぶどうの木の例えで話されています。ちょっと長めに引用されていますね。「エジプトから連れ出されたのは、羊飼いでして連れ出してくださいました。パンを食べさせてくださいました。そして神様は農夫なので、エジプトからぶどうの木を連れ出して植えました。深く根を張って地にはびこって栄えました。しかし食い荒らされています。だから見てください。右の手が植えた苗とご自分のために強くされた枝を見てください。これは切り倒されています。どうぞ助けてくださいと、御顔の光を元に返して照り輝かせてください。」と頼んでるところです。

私達は本当のぶどうの木、まことのイスラエルの長男です。私の父は農夫ですというところは、イスラエルを表す植物、ぶどうとかイチジク、オリーブですけど、そのぶどうの木、新しいイスラエルは、私について決して離れません。すがっています、とどまっていますということを話すところです。「愛にとどまりなさい」というところですね。

主にすぎる、主にとどまるということは、第2列王記1章のところにこんなところがありますね。イエス様はヨシュアですけれども、新しいエリシャだということも言えます。エリヤの弟子ですね。エリヤから霊を受けるエリシャ、バプテスマのヨハネから霊を受ける新しいエリシャというテーマになっていると思います。エリヤがもう死にます、天に上りますという時に、ベテルでここにいなさいと言われて、「いや私は離れません」、エリコで「いや私は離れません」、ヨルダンで「いや私は離れません」と3度言うわけですね。3度「私は離れません、私はあなたにすぎります」と言っているエリシャのことも、ここで思い出さなければいけないかなと思います。

13章、14章、15章、16章のところで、何度も言われるところですね。「何でも欲しいものを求めなさい。そうすれば与えます。」と。「求めなさい、そうしたら与えます」、「求めなさい、そうしたら与えます」というのは、王様が言う言い方で、ソロモンのところでも、ほかの王様の言い方でもあると思います。そこでエリヤが天に上りますと言った時に、「私はあなたのために何をしようか、あなたの所から取り去る前に求めなさい」と言って、エリシャは「霊をください」というふうに頼むと、霊がエリシャにとどまる。その後も同じような事が、今度はエリシャと女の話で、「何をしてあげようか、願え」というようなものもあります。ここでエリシャがエリヤに求めなさいと言われてた時に、霊が与えられました。この霊の話は、14章の真理の御霊、助け主である御霊というのが、この14章、16章で出てくるところを連想するところかというふうに思います。十字架にかかり復活した後に、ヨハネの21章でペテロが言うところですね。ペテロがイエス様に「私を愛しますか」と3度聞かれるところです。「私を愛しますか」と3度聞かれて、「あなたはご存知です」と言うと、「私の羊を飼いなさい」という言い方を3回しますよね。そこもこの「私を愛しますか」「私は離れません」というのに似ています。「羊を飼いなさい」と言われているところは、仕えなさいと。私の羊ですから教会に仕えなさい、しもべとして仕えなさいと言われているのかというのを思います。「羊を飼いなさい」と。主のしもべ、アブラハムも、モーセも、ダビデも、主のしもべは羊飼いでした。

「十戒の2」と書いてあるところは、仕える、愛する、拝む、離れる、見捨てる、そういうところが「憎む」というキーワードがここに入っていますので、こういうところは大切な箇所になります。「他の神々偶像に拝むな、仕えるな、私を憎む者と、私を愛する者、命令を守る者」というキーワードがここに入っていますので、奴隷の家から連れ出すと言っている主が、この命令を教えていると。古い時代から救って、新しい出エジプトということを言っている「教える、仕えること」と、「愛すること」ということかと思います。

上の方(13:2-11、13:12-20)は例え、もしくはたとえ行動ということです。(13:21-30、13:31-35)今その時ですよと、成就すると。これ(15:1-6、15:7-12)はたとえ、たとえと意味を教えて、(15:13-17、15:18-25)今その時ですよというのは、この下の段かなと思います。13ところに「成就するのです」、15の20に「成就するのです」、「理由なしに憎む、裏切る」ということがここに書かれているということで、全体の構造をこのように分析してみました。